

偉大なる愛すべき存在
(高木先生への感謝の思い)

上田 裕康

あまりにも突然の訃報でした。私の中では、高木先生は、永遠の命をお持ちだという思いさえありました。いつも、「俺は引退する」「俺はもう死ぬ」ということをおっしゃっていましたが、誰も本気にはしていませんでした。1935年生れの82歳の高木先生には、これからも、ますます頑張ってもらいたい、ご指導を仰ぎたいという気持ちを皆が持っていたことと思います。今でも、高木先生が亡くなられたということが信じられません。いつでも、どこでも、また、お会いできるような気が常にしています。

高木先生は、常に新しいことに挑戦をされ続けてこられました。弁護士任官第1号の裁判官として、産業再生機構の産業再生委員長として、事業再生ADRの創設者として、全倒ネットの生みの親として、事業再生分野でのご活躍は、日本の事業再生の歴史に、偉大なる足跡を残されました。私にとって、高木先生は決して追いつくことはできない人生の目標であり、師でした。そして、まるで自分の父であるかのような親しみを感じていました。

私は、東アジア倒産再建シンポの事務局の一員として、この10年余り、高木先生と非常に親しくさせて頂きました。日本だけでなく、東アジアの倒産再建について深い関心を持ち、中国、韓国の倒産再建の専門家との間において、緊密な関係を構築され、東アジアの倒産再建手続の進化に対して非常に強い影響を与えられました。高木先生なくして、今の東アジア倒産再建シンポは存在しなかったことは間違いありません。

高木先生の類まれなる能力と業績については、私がお話をするまでもなく、皆様がよく御存知のところでは、私には、愛すべき高木先生のお人柄について少しお話をさせてください。国内、海外を問わず、シンポに出席された高木先生は、発言の機会を与えられると、真っ先に手を挙げて、質問をされました。高木先生と一緒に出席させて頂いたシンポでは、発言の時間になると、私は直ぐに高木先生の方を見ます。そうすると、高木先生は期待を裏切ることなく、必

ず、発言をされるのです。その発言内容は、シンポの内容をよく理解していないとできないものであり、高木先生がいかにか真剣にシンポに取り組んでおられるのか、深く物事を理解されているのかを如実に物語るものでした。

海外のシンポでも、高木先生は必ず発言をされます。高木先生の英語は、決して流暢ではありませんが、シンプルで分かりやすい英語です。外国人の中で、英語で発言するのはなかなか度胸がいると思うのですが、高木先生は、いつも平然として、的確な質問をされていました。一度、このようなことがありました。香港で開催された INSOL（インソル）の大会であったと思いますが、高木先生が質問をしている途中で、司会者が高木先生の発言を遮ってしまい、終了させてしまいました。確かに、高木先生の英語がゆっくりとしていて、司会者としては時間のことが気になったのだと思いますが、私は、高木先生の発言が途中で終了させられたことが腹立たしかったことをよく覚えています。その夜、ディナーがありましたが、高木先生の隣には、リーマン事件を担当された米国のペック元判事も奥様と一緒に出席して食事をされており、高木先生や私と会話をされたこともなつかしい思い出です。

高木先生は、よく短気と言われ、高木先生から叱られた方は沢山いらっしやると聞いています。私は、残念ながら高木先生からお叱りを受けた記憶はほとんどありません。だからというわけではありませんが、私は、高木先生のこと、実の父親のように思えてとても好きでした。高木先生が目を細めて多少恥ずかしそうにお話になる姿をみると、失礼な表現かも知れませんが、とても可愛いく、愛らしく思いました。「俺は死ぬ」「俺は引退する」というお言葉は、高木先生として、自分のお気持ちに正直に話をされていたのではないのでしょうか。事業再生の世界で生き抜き、常に、最大限の情熱を発揮し全力で物事にあたってこられた高木先生にとって、毎日、毎日が、自分の命をかけた戦いであつたのではないかと思います。そのことを、「俺は死ぬ」という言葉で表現されていたのではないのでしょうか。また、「俺は引退する」というお言葉からは、本当は、仕事を辞めて、お好きな趣味の世界でゆっくりと楽しまれたかったのだろうと推察します。しかしながら、日本、東アジアの事業再生のために、まだまだやらなければならないことが沢山あるという使命感が、高木先生を引退させなかったのでしょうか。

高木先生の視線は、日本だけに止まらず、東アジア、そして、世界へと向いていました。クロスボーダーの倒産事件が増える前から、高木先生は、アメリカ倒産法に関心を持ち、「アメリカ連邦倒産法」（商事法務、1996年）を出版されました。常に未来を見て仕事をされていました。高木先生の発想と実行力と情熱は、何人も真似ることができないものではありませんが、後に残された私達は、常に高木先生の目指されたものを自覚し、高木先生のご遺志に沿って努力をしていかなければならないと強く決意をする次第です。時代は激動の最中にあり、経済圏として東アジアは一つと言えるような状況にあります。事業再生も、もはや日本だけで考えることはできず、中国、韓国、東アジア一体で検討すべき時代になっています。法の改革、手続のIT化のスピードは、韓国と中国が、日本を追い抜いてしまい、日本が、両国から学ばなければならない時代となってしまいました。高木先生は、日本の現状を非常に心配されていたことでしょう。私達は、高木先生と同じく、常に新しいことに情熱をもって挑戦を続けて行かなければなりません。

高木先生、本当に長い間ありがとうございました。そして、お疲れ様でした。天国でゆっくりと休んで頂くとともに、我々に、さらなる叱咤激励を送って頂けるものと信じております。また、いつか、お会いする日を楽しみにしております。心から御冥福をお祈りします。

以上